雅歌

雅歌はヘブレオ語では、シル・ハッシリム・すなわち「歌の歌」と称ばれているがこれは例えば "Coeli coelorum" (天の天) のように、最上級を表わすもので、ドイツ語では "Das hohe Lied" (高雅なる歌)、すなわち「あらゆる歌の中で最も美しいもの」というように、また英語では "Canticle of canticles"、フランス語では "Le cantique des cantiques" (共に「歌の中の歌」という意) というように訳されている。

本書の題名はサロモンの雅歌となつており、七十人訳には ο ᾆσμα τῶν Σολομῶν とあるので、この著者は最近までサロモン王と見なされていた。しかしこれにまた結婚の歌として「サロモンに捧げられた」、という意味のあることも爭われない。それである人々は――カトリックの釈義学者たちも――本書はサロモンより後代になつて漸く出来たもので、その年代はキリスト紀元前八百年より前ではないと考えているのである。

内容に関しては、雅歌が合理主義者たちの主張している如く、ただ花嫁や夫婦たる身の、殊にサロモン王がエジプト王女と結婚した時の、愛情の発露ではなくて、先ず花婿たる天主とその愛し給う花嫁たるイスラエル民族との仲、次いで淨配たるキリストと天主からイスラエル民族に与えられた宝の後継者たる聖会、およびキリストの御血を以て贖われたすべての人との仲、わけても天主と特に親しく一致しておられた聖母とのそれを謳つた讃美歌として、譬喩的意義に解すべきことは間違いない。

本書は、ユデア人にもキリスト教徒にも、正典と認められている。

第一章

花嫁花婿の相互の愛

一　願わくは彼その口の接吻もて、我に接吻せんことを[1]そ
二　は汝の乳房は葡萄酒[2]に優り、最匂わしき香膏[3]の薫
三　香を放てばなり。汝の名[4]は注がれたる油の如し、されば
　　こそ若き処女等は汝を愛したるなれ。[5]
四　我等汝のあとより香膏の薫香を慕いて走らん。王は我を
　　導きて酒窖に入れ給えり。我等汝によりて喜び楽しみ、葡
　　萄酒よりも汝の乳房を憶わん。直き者汝を愛す。
五　イエルサレムの娘等よ、我は黒けれども[6]美しくして、ケダル[7]
　　の天幕の如く、サロモンの帷帳の如し。[8]
六　わが色黒きを視の給うなかれ、其は日わが色を変えたるなり。わが母の子等
　　我を攻め、我を葡萄畑に置きてそを守る者となしたり。我

第一章　[1]第一段は、本一・一―二・七。本章一―六節は、花嫁の言葉もしくは花嫁を代表するイエルサレムの娘たちの合唱する歌。―[2]喜び楽しみの源たる「葡萄酒」。―[3]香膏は饗宴の際に用いられた。―[4]人物。[5]処女たちとは、心の正しいすべての人。―[6]花嫁の言葉。[7]ケダルはイスマエルの一族、荒野のアラビヤ人。―[8]それでもサロモンの王宮の見事な帷帳のように美しい。

六　わが葡萄畑を守らざりき。9）六わが霊魂を愛する者よ、汝何処にて牧い、正午には何処にて臥し給うやを我に告げ給え、これ、我が汝の伴侶の群を追いつつ彷徨うことなからんためなり。

七　七ああ婦人の中にて最も美しき者よ、汝もし10）己が在処を知らずば、出でて群の足跡を辿り行き、牧者の天幕の傍にて汝の仔山羊を牧え。

八　八わが女友よ、我は汝をファラオの戦車の騎兵隊に譬えたり。11）

九　九汝の頬は山鳩12）の如く美しく、汝の頸は宝玉の装飾の如し。13）

一〇　一〇我等汝の為に銀を鏤めたる金の鎖を造らん。14）

一一　一一王その食卓に倚り給える間、15）わが甘松16）はその芳香を放てり。

一二　一二わが愛する者は我にとりてわが乳

9）かの女は娘たちになぜ自分が日に焦けたかその理由を知らせる。それはその兄弟がかの女に強いて、他人の葡萄畑でつらい労働をさせ、自分のそれはなおざりにさせたから、というのである。転義は、異教徒がイスラエル人を天主に背かせたこと。―10）花婿の答。七節を花嫁に対する歌隊の答と解する人もある。そうすれば花婿の答は八節から始まる。11）この喩は数頭立ての馬の飾りをさしている。ファラオは最も華美を好む君主とされていた。―12）貞潔貞淑の喩。ヘブレオ語本一鎖（真珠か宝石の）もて飾られ」。―13）ヘブレオ語本「首飾を着けて」―14）われその上になおこれをなんじに与えよう。―15花嫁の言葉。16）彼女が彼の頭に注いだところの。

一三　房の間にある没薬の束なり[17]。一三わが愛する者は我にとりて、エンガッディの葡萄畑にある一叢のキプロ[18]なり。一四わが女友よ、視よ、[19]汝は美しきかな、視よ、汝は美しきかな、汝の眼は鳩の眼の如し。一五わが愛する者よ、視よ、[20]汝は美しくして、愛らしきかな。我等の臥床は花に満てり。[21]一六我等の家々の梁は杉にして、我等の椽は糸杉なり。[22]

第二章　花婿の訪問

一　我[1]は野の花、また谷の百合なり。二娘等の中にわが女友あるは、[2]茨の中に百合ある如し。三息子等の中にわが愛する者あるは、[3]森

17) 樹脂の一種の没薬は、芳香があるので、婦人達が小さい袋に入れて胸にかけた。—18) 死海の西岸にあるエンガッディのオアシスに生ずる薫の強い蘭の一種。—19) 花婿の言葉。20) 花嫁が急いで答える言葉。—21) 新郎新婦の坐する若草の褥。—22) 一説によれば、本節は緑の芝生に坐ろうという花嫁のすすめに従う花婿の言葉で、周囲の様を説明したものであると。

第二章　1) 花嫁の言葉。—2) 花婿の答。3) 花嫁の言葉。

四　の樹の中に林檎の樹ある如し。我その蔭を慕いて、その下
五　に坐せり。その果はわが口に甘かりき。
六　窖4)に入れ、わが衷に愛を整え給えり。5)
七　立て、林檎もて我に力づけ給え、そは我愛するあまり病み
八　たればなり。六その左手はわが頭の下にあり、その右手は
九　我を抱かん。6)七エルサレムの娘等よ、我7)羚羊と野の鹿
一〇　と8)にかけて切に汝等に請い願う、わが愛する者をその自
ら欲するまで、起すなかれ、目覚めしむるなかれ。9)八わが
愛する者の声なり、10)視よ、彼は山を跳び、丘を越えて来
り給う。11)九わが愛する者は羚羊の如く、またわかき鹿の如
し。視よ、彼は我等の壁の後に立ち、窓より覗き、格子12)
より望み給う。一〇視よ、わが愛する者我に語り給う、〃わ
が女友よ、わが鳩よ、わが美しき者よ、起ちて、急ぎ来れ。

4) 強い甘美な愛の象徴。―5) 原典は「そのわが上にひるがえしたる旗は愛なりき」。―6) 救世主は御手もて聖会をかくの如く保ち、やさしく慰め給う。
7) 花婿の言葉。―8) かもしかや鹿はアラビアの詩歌では愛の象徴。―9) 譬喩的に、霊魂の歓喜の恍惚状態。これで第一段終る。本八・四参照。―10) ここから第二段が始まる（本二・八―三・五）。最初は愛人の来るのを見る花嫁の言葉。―11) 御栄光の高き処から、永遠の御言が人類のもとへ来給うた。―12) パレスチナの家屋の窓には細い木の格子がある。

一一　二夫れ、13）冬は既に過去り、雨もやみて今はあらず。一二諸々の花我等の地に現れ、枝剪る時既に至り、山鳩の声我等の地に聞ゆ。14）一三無花果の樹は蓓を生じ、葡萄の樹は花咲きてその芳香を放つ。わが女友よ、わが美しき者よ、起ちて来れ。一四岩の罅隙におり石垣の凹処におるわが鳩よ、我に汝の面を見せよ、わが耳に汝の声を聞かせよ。実に汝の声はやさしく、汝の面は愛らし。〃と。一五葡萄の樹15）を害う小狐16）を我等の為に捕え給え、蓋は我等の葡萄畑、今花盛なればなり。一六わが愛する者は我のもの、我は彼のものなり、彼は百合の中にて羊群を牧い給う、一七日の涼しくなり、影の傾くまで、わが愛する者よ、帰り来り給え、ベテルの山17）の羚羊の如く、また若き鹿の如くにして。

第三章

花嫁花婿を探し求む

一　一我1）夜臥床にありて、わが心の愛する者を探ねけるが、之を探ねた

13）花婿の談話。
14）パレスチナの山鳩はエジプトで冬を越すのが慣い。
15）花嫁の言葉。
16）葡萄畑に穴を掘つてこれを害する狐とは、イスラエル人を棄教に導いた異教徒であるカナアン人のこと。
17）峨々たる山々。

第三章　1）花嫁の

二　れども見出さざりき。三我起き出でて、市を歴り、巷に広場に、わが心の愛する者を探ねん。我彼を探ねたれども、見出さざりき。三市を守る夜警の者等2）我に逢いぬ。

四　「汝等、わが心の愛する者を見かけざりしや。」四我彼等と擦れ違いてより少時にして、わが心の愛する者を見出したり。我彼を引留めぬ、我は之をわが母の家に伴い行き、我を産みし者の部屋に入るまで、彼を離さじ。3）

五　五イエルサレムの娘等よ、我4）羚羊と鹿とにかけて、切に汝等に請い願う、わが愛する者をその自ら欲するまで起すなかれ、目覚めしむるなかれ。

六　六香商人の没薬、乳香などの香料、及び諸々の抹香焚く煙の柱の如くに、荒野より上り来る者は誰ぞや。5）七視よ、イスラエルの強きが中にも強き六十人の人々、サロモンの牀6）を囲めり、

言葉。花嫁（譬喩的にはイスラエル国民）は多くの同胞の棄教を恥じて、花婿に遠ざかり給えと一度は願つたが、またかれを探し求める。―2）「夜警の者」とは、神秘的な意味でまず第一に予言者達、次いで教会の牧者達。即ち天主の御言葉を教える人人。―3）パレスチナの風習では結婚式は花嫁の母親の家で行なわれ、そこから新郎が新婦を連れてゆくのである。

4）花婿の言葉。本二・七と同じ。

5）第三段（本三・六―五・一）。まず歌隊が花婿と花嫁とに挨拶する。―6）花嫁を載せる輿。その周囲には六十人の近衛兵が付いていた。

八　皆劍を執り、戰うに巧なり、夜間の危難に備えて各人劍を腿の上に置けり。7)

九　サロモン王は己が為に、リバノンの木もて輿を8)造りぬ。一〇その柱は白銀、その凭掛は黃金、その階段は紫の天鵞絨にて造り、中央にはイエルサレムの娘等の為に、愛を敷けり。9)

一〇　シオンの娘等よ、出でてサロモン王を見よ、彼はその婚姻の日、心の喜悅の日に、その母が之に被らしめし冠10)を着けたり。

第四章

花婿その花嫁の美しさを称う

一　汝は1)如何に美しきぞ、わが女友よ、如何に美しきぞ。内部に隱れたる所のことは措きて之を云わずとするも、2)汝の眼は鳩の眼なり。汝の髪はガラー

7) イスラエル人に対しては、興とは契約の櫃、強き者とは司祭やレヴイ人のこと。教会に対しては、強き者とはそれを暗黑の軍勢から護る使徒達や教会の教師等。―8) ヘブレオ語「アツピリオーン」、花嫁の寢床の意。―9) イエサレムの娘達は花嫁のスラミトを愛する心からその居間を飾つた。―10) パレスチナでは新郎新婦が結婚の日に冠を飾りとする。

第四章　1) 花婿の言葉。―2) ヘブレオ語本「なんじの面帛のかげにありて」。花嫁は面帛をかけて結婚式に連れて行かれた。

二　ドの山に上り来る山羊の群の如し。
三　汝の歯は、毛を剪られて洗場より上り来る羊の群の如し、皆双子を持ち、その中に仔なきものはあらず。3)
四　汝の唇は深紅の紐の如く、汝の語るは愛らし。内部に隠れたる所のことは措きて之を云わずとするも、4)
五　汝の頬は石榴の一片の如し。
六　汝の頸は防壘と共に建てたるダヴィドの塔の如し、その上には一千の楯掛かれり、5)
七　皆勇士の武器なり。
八　汝の双の乳房は、百合の中にて草喰む双子の若き二匹の羚羊の如し。6)
九　日の涼しくなり、影の傾くまで、我は沒薬の山、乳香の丘7)に行かん。
十　わが女友よ、汝は全く美しくして、その身に一点の汚れもなし。8)
十一　リバノンより来れ、わが花嫁よ、リバノンより来れ、汝はアマナの頂より、サニル及びヘルモンの頂より、獅子の穴よ

3) 即ち花嫁の歯が白くてよく揃っているとの意。―4) 一節と同様。
5) 花嫁の首飾りをさす。―6) 本節は暗に花嫁の純潔にして成熟していることをさす。彼女がいと潔き乳で養うのは、聖会のその子らに対する母性愛の喩。―7) 多分天主に燔祭や香や沒薬を献げた聖殿の山をさすのであろう。―8) 本節にはパレスチナの北部に住んでいた異教徒のことが暗示されているのらしい。花嫁にはその周囲の人人から離れて花婿の保護に身を委ねてほしいというのである。獅子や豹はイスラエル人に敵意をもつ異教民族の象徴（耶五・六）。

九　り、豹の山より来りて、冠を加えられん。[8]
　　わが妹よ、花嫁よ、
一〇　汝はわが心を傷けたり、汝はその一眼もて、その頸の一筋の髪もて
　　わが心を傷けたり、一〇わが妹よ、花嫁よ、汝の乳房は如何に美しき
　　ぞ。汝の乳房は葡萄酒よりも美しく、汝の膏の芳香はあらゆる香料
一一　にも優れり。[9]　一一わが花嫁よ、汝の唇は蜜を滴らす蜂の巣なり、
　　汝の舌の下には蜜と乳とあり、また汝の衣服の薫は乳香の薫の如
一二　し。一二わが妹よ、花嫁よ、汝は閉じたる園、[10]閉じたる園、封じた
一三　る泉なり。一三汝の作りしものは、石榴及び諸々の果実ある楽園、キ
一四　プロ蘭、及び甘松、一四甘松にサフラン、菖蒲に肉桂、ならびにリバ
　　ノンの諸種の木、沒薬、蘆薈、及びすべての優良れたる香料なり。
一五　一五園の泉、リバノンより激しく流れ来る活ける水の井。一六北風よ、
一六　起れ、[11]南風よ、来れ、わが園を吹き過ぎて、その芳香を漂わせよ。

[9] 本一・一―三参照
[10] 「閉じたる園」とは、天主がイスラエル人に与え給う地に対する妥当な名称。聖会及び天主の御意に適うすべての人の霊魂も、その天主から戴く聖寵ゆえにかく称することができる。
[11] 花嫁の答。

第五章

花嫁花婿を探ぬ

一　わが愛する者己が園に来りて、1）その林檎の果を食せよかし。わが妹、花嫁よ、我2）はわが園に入り、沒葉と香料とを集め、蜜と共に生蜜を食し、乳と共に葡萄酒を飲めり。女友等よ、食せよ、わが愛する者等よ、飲みて醉えかし。3）二　我は4）眠れども、わが心は覚む。わが愛する者の声す、戸を叩きて云う、〃わが妹よ、わが女友よ、わが鳩よ、わが汚玷なき者よ、わが為に開け。5）わが頭は露に、わが髪は夜の雫に満ちたり〃と。6）三　我は7）わが衣服を脱ぎたり、い

第五章　1）花嫁の言葉。花婿は前章で花嫁を園に譬えた。花嫁は今「かれの園」と自称する。即ち自分の有する限りの美点長所を悉くかれに献げるのである。―2）ここからまた花婿の言葉。―3）第三段は本節で終る。新婚の夫婦に親しい、すべての人に対する披露の宴への勧誘。食物は花婿の園に出来たもの。即ち転義では分配のため教会に委ねられた聖寵。―4）第四段は本五・二―六・八。まず花嫁の言葉。眠っている時さえ新婦は新郎を忘れない（夢のなかでも、恍惚の境にあっても）。5）花婿の言葉。―6）新婦が戸をあけるのに躊躇しているので、新郎がかく言って早くせよと催促する。かれは寒いのである。―7）花嫁の早く戸をあけることができなかった言訳。

四　かでか着るを得べき。わが足を洗えり、いかでか汚すを得べき。

五　わが愛する者その手を戸の隙間より差入れ給えり、8)その触れし時9)わが心腸震い動けり。

六　我起き出でて10)わが愛する者の為に開かんとしたるに、没薬わが手より滴り、いと貴き没薬わが指に満てり。

七　我わが愛する者の為に、わが戸の閂を開きぬ、されど彼は背を向けて去り居給えり。その語り給いし時、わが心溶けたり。我彼を探ねしが見出さず、呼びたれども彼我に答え給わざりき。

八　市を廻る夜警の者等我に逢い、我を打ちて傷つけたり。11)石垣を守る者等我よりわが袍を奪い取れり。

九　イエルサレムの娘等よ、12)我汝等に切に乞いて云う、「汝等もしわが愛する者を見かけなば、我愛によりて病めりと之に告げよ。」と。

九「ああ、女の中にて最も美しき者よ、愛する者

8)花婿は自分で戸をあけようとする。家々の戸は内部から木の閂で閉鎖してあつたが、それは戸の隙間からあけることができた。—9)閂に触れた時。六節参照。—10)新婦は自分の逡巡したことを悔いて、戸をあけようと立ちあがるが、それでもなお遅すぎる。新郎はもう立ち去つていた。—11)前に改めてからまた罪に陥るのは、一段と重いとが、で、一層悪い結果を己に招く。故に著者は三・三の対照としてここで花嫁を虐待させている。

12)イエルサレムの女達との対話本五・八—六・二。

一〇　の数ある中にて汝の愛する者はそも如何なる者ぞや。愛する者の数ある中にて汝の愛する者は抑如何なる者なれば、汝かくも切に我等に乞うや。」

一一　する者は白くまた紅くして、数千人の中より選まれたり。

一二　その頭は純金、その髪は椶櫚の枝の如く、黒きこと鴉をあざむく。

一三　その眼は鳩の水の小流のほとりにあるもの、また乳に洗われて、満々たる流の傍に住むものの如し。

一三　その頰は香商人の植えたる芳草の苗床の如く、その唇は最良の沒薬を滴らす百合の如し。

一四　その手は形好くして風信子石に満ちたる黄金の如く、その腹は青玉を嵌めたる象牙の如し。13)

一五　その脛は黄金の台に立てたる大理石の柱の如く、14)その容姿はリバノンの如くにして、その杉の如くに優れたり。

一六　その咽喉は最快く、実に彼は悉く好ましし。イェルサレムの娘等よ、わが愛する者はかくの如し、しかして彼わが友たるなり。

一七　「ああ、女の中にて最も美しき者よ、汝の愛する者は何処へ行きしや、汝の愛する者は何処へ向かいしや、我等汝と共に彼を探ねん。」15)

13) 青玉とは帶の飾りのいろいろな宝石のこと。
14) 彫像を思わせるような記述。
15) 花嫁の友だちの言葉。

第六章

花婿の来着とその談話

一　「わが1)愛する者は、園の中にて羊群を牧い、2)また百合を摘まんとて、己が園に下り、芳草の苗床に至れり。

二　我3)はわが愛する者のもの、わが愛する者は我のものなり、彼は百合の中にて羊群を牧う。4)」

三　わが女友よ、汝5)は美しきかな、愛らしくして艶かなることイェルサレムの如く、畏るべきこと6)陣立を整えたる軍勢の如し。

四　汝の眼を我より離せかし、そは我をして飛びつかしむ7)ればなり。汝の髪はガラードより現れ来る山羊の群の如し。

五　汝の歯は洗場より上り来る羊の群の如し、皆双子を持ち、その中に仔なきものはあらず。

六　汝の内部に隠れたる所のことは措きて之を云わずとするも、8)汝の頬は石榴の皮の如

第六章　1)友達に対する花嫁の言葉。―2)「花などを眺めて楽しむ」の意。―3)花嫁は花婿を見出して、自分の怠慢の赦しを得た。―4)註二と同じ。―5)花婿の言葉。―6)ただ美しいばかりでなく強くもある。譬喩的にはイスラエルの輝かしい武勲をさす。―7)「逃げ去らしむ」と訳する人もある。―8)ヘブレオ語本「なんじの面帛のかげにありて」。本四・三参照。

七　し。后六十人、側室八十人あり、処女に至りては
八　その数を知らず。わが鳩、わが全き者はただ一人
　　のみ、そはその母の独子にして、之を産みし者の寵
　　兒なり。9)
九　娘等は之を見ていと至福なる者と称え、
　　后等側室等も之を讃めたり。
　　曙光のさし上る如く
　　立ち現われ、月の如く美しく、日の如く煌めき、陣
　　立を整えたる軍勢の如くに畏るべき者は誰ぞや。10)
一〇　我、11)谷の果実を見、葡萄の樹花咲きしや、石榴
　　また芽ぐみしやを査べんとて、胡桃の園に下りしが、
一一　我何事も知らざりき。時にわが心アミナダブの
　　車12)の為に乱れたり。帰れ、13)帰れ、スラミトよ、14)
一二　帰れ、帰れ、我等汝を観まほしければ。

9) スラミトがその母の寵児であつたように、かの女にもこれから私の唯一の愛人になつてほしい。―10) 第五段（本六・九―八・四）。本節は合唱。
11) 花嫁の言葉。―12) 王の車に乘り伴まわりの者を連れた花婿の来着。―13) 歌隊はスラミトにはじらつて尻ごみせず自分の讃美を聞けと頼む。―14) スラミトとは、サロモンというヘブレオ名の女性。故にこれは夫妻の仲の極めて親しいことを示す譬喩的な名称。

第七章

花嫁の舞——花婿の称讃

一　汝、スラミトに何を見んとするや、ただ陣営の輪舞のみに非ずや。1）君侯の娘よ、沓を穿きたる汝の歩みは如何に美しきかな。2）汝の腿の附根は、巧なる工人の手に造られたる宝玉の如し。

二　汝の臍は酒を缺くことなき刳りたる杯の如く、汝の腹は麥積み重ねて之を百合もて囲みたる如し。

三　汝の双の乳房は、双子なる若き二匹の羚羊の如し。

四　汝の頸は象牙の塔の如く、3）汝の眼はヘシボン4）にて衆くの娘の門の辺に5）ある池の如く、汝の鼻はダマスコの方を望むリバノンの塔6）の如し。

五　汝の頭はカルメルの如く、7）汝の頭髪は畳

第七章　1）花嫁が花婿に希望を尋ねるとかれは、スラミトを輪舞の長として踊ることを頼む。輪舞とはマハナイム（二重の輪）の舞踊。創三二・二参照。—2）ここから合唱が始まる（七・一—五）。—3）多分大理石を用いたサロモンの一建造物。4）ヘシボンとはヨルダン河東方の地にあつた昔の一都市。この町には、バトラツビムにゆく街道の一つの門の傍に、二つの池があつた。—5）ヘブレオ語本「バトラツピムの門のほとりに」。—6）多分リバノンにある王の遊楽の建物の名前。7）王妃の頭が取巻きの者共の上に抜んでているのが、ちようど遠くからも見える

六　みて結びたる王の紫衣の如し。
七　最愛の者よ、8）汝は愛らしくして、如何に美しく、如何に艶やかなるかな。
八　汝の身長は棕櫚樹に、また汝の乳房は葡萄の房に似たり。
九　我謂えらく、〃我この棕櫚の樹に上り、その実を採らん〃と。汝の乳房は葡萄の房の如く、汝の口の香気は林檎の如くならん。
一〇　汝の咽喉は、わが愛する者が飲み、その唇と歯とが味わうに応わしき、美き葡萄酒の如し。
一一　一〇我はわが愛する者のものにして、彼の心は我に向かう。
一二　来れ、わが愛する者よ、我等野に出で、村に宿らん。9）
一三　我等朝早く起きて葡萄畑に行き葡萄樹の花咲きしや、その花将に実とならんとするや、また石榴の花咲きしやを見ん。我彼処にてわが愛10）を汝に捧げん。
一三　蔓陀羅華11）は薫を放てり。我等の門には諸々の果物あり、わが愛する者よ、我汝の為に、その新しきをも古きをも蓄えおけり。

カルメルのよう。
8）花婿（六―九節）と花嫁（七・一〇―八・三）との対話。
9）かの女は田舎の故郷にゆきたいと望む。田舎の生活とは、都市に拡まつている異教を容れないことの象どり。
10）原語「乳房」。
11）古人が愛と多産との象徴にしていた植物。

第八章

永遠の契り

一　二　三　四　五

一 我が1)外にて汝に逢い、汝に接吻するとも、最
早我を蔑む者のなからんために、2)汝を我に与え
て、わが母の乳房を吸う兄弟となさん者は誰ぞ、3)
二 我汝を執えて、わが母の家に導き至らん、汝彼
処にて我に教え給うべし、さらば我は香よき葡萄
酒の杯と、わが石榴の新酒とを汝に献げん。三 そ
の左手はわが頭の下にあり、その右手は我を抱か
ん。4)四 イエルサレムの娘等よ、我5)切に汝等に請
い願う、わが愛する者を、その自ら欲するまで、
起すなかれ、目覚めしむるなかれ。五 已が6)愛す
る者に倚り懸りて、喜悦に溢れながら、荒野より

第八章 1)花嫁の言葉。七・一三から八・七まで続く。—2)ベドウイン人の乙女は、人前ではただ兄弟か従兄弟にだけ接吻してもよかつた。—3)花婿は今まで花嫁を妹とよんでいたが、女は男を兄とは言わなかつた。ここでかの女はかれが肉親の兄であつてくれればよいにと望む。4)本二・六と同じ言葉。—5)花婿の言葉。本二・七、三・五と同じ。—6)本六・九参照。第六段は八・五—七。イスラエルの娘たちの言葉。

六

上り来る者は誰ぞ。7) 我林檎の樹の下にて8) 汝を起せり。汝の母は彼処にて弱り、彼処にて傷つきぬ。9) 六 我10) を印章の如くに汝の心に捺し、印章の如くに汝の腕に捺し給え。其は11) 愛は死の如く強く、嫉妬は冥府の如く執拗なれば なり。その燃ゆるは実に火なり焰なり。七 愛は多量の水も之を消す能わず、流も之を沒する能わず。愛の為には人その家の全財産を抛つとも、物の数とせざるべし。八 我等の妹12) は小さくして、未だ乳房なし。我等の妹が婚を求めらるる日には、我等之に何をか

7) 花嫁たるイスラエルが、エジプトを出て荒野を通つたことを表わす。約束の地に入ることができたのは、ただ天主の御助けによつてのみ。—8) 花婚の言葉。神秘的夫妻は、そぞろあるきの間に思い出深い木に出会つた。彼らが始めて愛の言葉をかわしたのは、そこにおいてであつた。—9) ヘブレオ語本「汝の母はかしこにて汝を産みぬ」。エワは一樹の下で我らを死に生みキリストは十字架の木で救いをなしとげ我らを超自然的生命に生み給うた。—10) 花嫁の言葉。これを五節後半の続きで花婚の言葉と考えている人もある。印章は非常に大切に保存したもので（基二・二三）、指環として指にはめるか、紐を付けて首から胸に下げるかした。—11) イエルサレムの娘たちの合唱の歌（六節後半—七節）。—12) 本文は第七節の愛の讃歌で終る。八—一四節は附加文である。ある解釈者は、これは花嫁の妹のことで、ユデア教を象徴したもの、これに対し花嫁はキリストの教会を象徴したものと考えている。し

九

なさん。13）九彼女もし石垣なりせば、我等その上に白銀の防塞を建てん、彼女もし扉なりせば、之に杉の板を張らん。一〇我14）は石垣、わが乳房は塔の如し、我が彼の前にありて、平安を得たる者の如くになりてより以来然り。15）一一温和なる者は、民ある処に葡萄畑を有ちたりしが、16）守る者等に之を付せり。されば、いずれの人も、その果の為に銀一千枚

一〇

一一

かし前後の関係では、この「小さき妹」とはスラミトをさし、従つて附加文は彼女の結婚の少し前の挿話が述べてあるものと思われる。多くの解釈者によれば、兄弟とは譬喩的意味でイスラエル人を偶像礼拝に導こうとした、すなわちイスラエル人の花婿たる天主との結婚に反対した異教徒をさすと解されている。花嫁の選んだ花婿に堅くすがりついているという答は、イスラエルが唯一の真の神を信仰していれば幸福であつて、これから決して離れないという意味である。他の解釈者によれば「兄弟」とは、天使。即ち彼らは花嫁が霊魂の浄配たる天主と天国で永遠の婚姻を許される資格があるかとの問をかける。―13）この問は、パレスチナの風習で兄が妹の結婚の世話をするが、まだ早すぎるから、九節にある如く、まず妹に嫁入仕度をしてやらなければならない、という意味。14）十分仕度が出来ているという花嫁の答。―15）私はすでにわが花婿のもの。「温和なる者」とはサロモンのこと。16）バール・ハモン市。

一二　を持参す。　一三わが葡萄畑はわが前にあり。[17]　一千は温和なる者[18]たる、汝のものにして、二百はその果を守る者等のもの。

一三　のなり。　一三汝[19]園の中に住む者よ、友等[20]は聴き従う。我をして汝の声を聴かしめよ。[21]

一四　一四わが愛する者よ、逃げ走り給え、[22]匂わしき山々の上におる羚羊の如く、また若き鹿の如くにして。

17）譬喩的意味で、葡萄畑とは天主の信仰をさす。そのためにイスラエルは快く最大の犠牲をも献げる。
18）ヘブレオ語本「サロモンよ銀千枚は汝のもの」。
19）花嫁を永遠の婚筵に呼ぶ花婿の言葉。　20）諸天使諸聖人。　21）感謝と愛との歌。　22）花嫁の言葉。これは花婿に遠ざかることをすすめるのではない。その意味は、永遠の丘に至るまで私を伴ない給え。